

研究種目： 基盤研究(C)  
 研究期間： 2007～2009  
 課題番号： 19520311  
 研究課題名(和文)「カーマ・シャーストラ」の発見と受容—その書誌学的、文献学的研究—  
 研究課題名(英文) Discovery and Receipt of "Kāma-sāstra" in Modern Japan  
 研究代表者 金沢 篤 (KANAZAWA ATSUSHI)  
 駒澤大学・仏教学部・教授  
 研究者番号： 20286686

研究成果の概要(和文)：「カーマ・シャーストラ」とは古代インドに於いて発達を見た「カーマ〔欲望／性愛〕の科学」と言うべきものである。それはヒンドゥー教や仏教などのインド起源の諸文化を理解し、近代日本人の精神形成を考える上で、不可欠で重要なものと言える。そうしたカーマ・シャーストラの近代日本に於ける発見と受容を、散逸しつつある貴重な書物についての書誌を作成し、その関連文献を網羅的に収集し、諸資料を読解することを通じて、具体的かつ歴史的に解明した。

研究成果の概要(英文)："Kāma-sāstra" is "Scientific treatise or teaching of kāma or desire/sexual love" that was brought up in ancient India. It is indispensable for understanding various cultures of Indian origins such as Hinduism and Buddhism, etc. and thinking about the modern Japanese's mental formation. The discovery and the receipt of "Kāma-sāstra" in modern Japan were clarified historically based on making the detailed bibliography of the rare books of underground that are getting scattered and lost, covering collections of the related literature and the comprehension of those various material.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	770,000	3,380,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：比較文学、カーマ・シャーストラ、インド文学、日本近代、翻訳文化、地下本

1. 研究開始当初の背景：本研究は先ず何よりも、18世紀に起こり、19世紀に大きな展開をとげ、20世紀の爛熟へと向かう近代インド学研究の歴史、研究史の中に、位置

づけられる。すなわち英国を中心とする西洋諸国のインドの覇権争いを背景とした「インド学の曙」へのアプローチと深く連動するものである。

カーマを制御することによる繁栄／幸福を説くバラモン教／ヒンドゥー教に対してカーマを真っ向から否定的要因と捉えて成立する仏教の思想研究においても、その基礎としてのカーマの研究は不可欠である。文献に即したカーマの多様な解明こそが課題と考えられるが、その書誌学的研究と言うべき本研究は、その為の重要な基盤をなすものと考えられる。

一つには、ヒンドゥー教諸学の中で果たすカーマとそれを神格化したカーマ神の位置づけ、さらに人間と神々の研究につながるものである。「カーマの矢—インド愛神考序説—」と呼応するものである。

本研究は、「カーマ・シャーストラ」文献の網羅的収集と、その書誌学的整備を主眼にしたものであるが、より直接的には2005年から2006年にかけて発表された合計218頁にも及ぶ「『カーマ・スートラ』は如何に受容されたか?—『印度愛経文献考』周覧(1)—」「『印度愛経文献考』周覧(2)—異訳・異本・異版の問題を中心に—」「ラメレス訳『カーマ・スートラ』の変遷—『印度愛経文献』考(3)」との一連の論攷の延長線上に位置づけられる。

本研究は、具体的には「カーマ・シャーストラの発見」「わが国に於ける受容の実態」「関連文献の相互関係」「世界における受容の実態」の四点を軸としたものであるが、上述のいわば本研究の準備研究に於いても、その四点に関わる充実した成果をあげている。それらを本研究ではさらに発展的に継承して、きわめて精度の高い利便性のある網羅的な書誌学的成果を期待し得るものと確信する。

また広大なものである筈の、世界各国に於ける受容の実態の解明は本研究で完了するものとは思われない。今後さらなる継続を必要とするものとなり、その成果は当然ながら出版文化史研究の観点からも注目すべきものとなる筈である。さらに、近代のインド学研究史の中に日本人研究者なども視野に入れたものの先駆けとなる。忘れられた過去の研究を発掘するきっかけにもなる筈である。「カーマ・シャーストラ」文献の原典研究はヒンドゥー教諸学の原典研究の一環として捉えることが出来る。

2. 研究の目的：インド学の黎明期を経て、「カーマ・シャーストラ」(インドの性愛学)が、どのように見出され、そしてその後どのように受容されていったかはインド学に携わる者にとっては大いなる関心事である。インドの宗教や思想、及び文化の重要な基盤をな

す「カーマ」についての教学である「カーマ・シャーストラ」がそれにも拘わらず、今日まで必ずしも十全に解明されることなく、放置されてきたことは不思議であるが、それにはやむを得ぬ事情があると言うべきである。そうした「カーマ・シャーストラ」研究の基礎ともなる、文献学的、及び書誌学的な研究が本研究である。即ち本研究は、『カーマ・スートラ』のサンスクリット原典の写本が1864年に出版された Th. アウフレヒトによるカタログに登録されて以来、公刊、私刊された「カーマ・シャーストラ」関連の膨大な数量に上る文献を遍く精査・渉猟し、それらの文献の正確なデータを取得した上で、それら文献相互の関係を闡明せんとしたものである。刊行された書物の多くが、ともすれば低俗な商業趣味を招き寄せ、また時に風俗潰乱に繋がるその内容の特殊性によって、種々制約を受けたことが、斯学の研究のかかる遅延を生んだのである。そのような特殊な事情を踏まえた上で、この時期を逃しては、この種の文献に関わる網羅的な調査研究はもはや適わないとの思いから、本研究は企てられた。

### 3. 研究の方法：

(1)「カーマ・シャーストラ」関連文献を便宜的に以下のように分類した上で、調査・収集を行う。

<1>サンスクリット原典 <2>翻訳(部分訳・全訳) <3>研究書 <4>論文 <5>関連編集物

(2)古いものではあるが、日本人研究者による最も学術的な装いをとった「カーマ・シャーストラ」研究の成果である岩本裕訳『完訳カーマ・スートラ』(1949)で引かれている「カーマ・シャーストラ」関連文献を網羅的にリストアップする。インターネットを最大限に活用して、文献の所在を確認し、購入出来るものに関しては出来るだけ早いうちに購入の手続きを取り、既に入手不可能なものに関しては、所蔵図書館などに当たり、参照し、複写などをする。

(3)外国語で書かれた最新の「カーマ・シャーストラ」研究の成果であるミリウス訳『カーマ・スートラ』*MallanAga VatsyAyana:Das KAmasUtra*(1987)、ドニガー他訳『カーマ・スートラ』*Kamasutra, A New Translation*(2002)、ジスク訳著『インドに於ける夫婦愛』*Conjugal Love in India:RatiZastra and RatiramaNa*(2002)付録の「参考文献」を精査し、上記文献リストを補い、同様に、資料の購入、複写を徹底して、収集する。

(4) 準備研究の成果の一端である拙稿「『カーマ・スートラ』は如何に受容されたか?—『印度愛経文献考』周覧(1)—」「『印度愛経文献考』周覧(2)—異訳・異本・異版の問題を中心に—」「ラメレス訳『カーマ・スートラ』の変遷—『印度愛経文献考』周覧(3)—」 所載の、外国語・邦語「カーマ・シャーストラ」文献リストのさらなる充実を図り、未入手、未調査の文献の調査を徹底的に進める。資料に関しては可能な限り何らかの方法で入手したい。

(5) ロンドン、パリを中心に、特に世界初出の「カーマ・シャーストラ」文献である、バートン他による英訳『カーマ・スートラ』関連の資料の徹底した調査、収集を行う。ロンドン、カルカッタ、ライプツィヒ、パリを中心に、文献の蒐集渉猟に完璧を期す。同時に、海外、国内の「カーマ・シャーストラ」研究者や、風俗史研究者などとのメールによる情報交換を密にし、資料収集に遺漏のないよう務める。同時に「カーマ・シャーストラ」関連のネットワークを構築したい。特に国内にあってはその初期の指導的な役割を果たした、大隅為三氏と泉芳環氏の遺族との交流を得て、その受容の実態に肉薄したい。

(6) 収集した書物に関しては、その書影をスキャナーを用いてコンピュータ内に蓄積する。併せて、それら書影データの公開への方途を模索する。画像として明確に残すことは火急の責務であろう。

(7) 19世紀末から20世紀前半にかけて刊行された「カーマ・シャーストラ」関連文献は、特に著訳者名、出典、刊行時などのデータが不明確である場合が多いため、それらの同定に努める。

(8) 特に「カーマ・シャーストラ」のサンスクリット原典に関しては、改訂、改版の実態を明確にすべく、テキストそのものの比較調査も可能な限り遂行したい。

(9) 準備研究としての上記拙稿を、本研究の一環としてさらに整備して増広すると共に、そこで浮上した種々問題点をより広い視野に立って調査を進展させ、資料を詳細に読み比べて論攷にまとめ、発表したい。

(10) 「カーマ・シャーストラ」の受容とも深く関わりのある、19世紀末から20世紀にかけての、世界各国の出版事情についても、

精査したい。

(11) 2000年に発足した Society for the Study of KAmAZastra (Komazawa)での「カーマ・シャーストラ」文献の読書会を継続させたい。

#### 4. 研究成果:

[2007年度]

・以下の(1)(2)(3)に見る通り、「カーマ・シャーストラ」関連文献の調査・収集を遂行し、それと並行して資料の解説・同定を進め、資料相互の関係を闡明しつつ、整理した。

(1) わが国の「カーマ・シャーストラ」の発見と受容に力点を置いた今年度は、その中心となる最初の和訳『カーマ・スートラ』の翻訳者たる大隅為三とサンスクリット原典からの最初の和訳『カーマ・スートラ』の翻訳者たる泉芳環の両名に関して重点的に調査を進め、「カーマ・シャーストラ」の発見・受容が日本近代に果たした意味・役割を重層的に考察した。中でも日本近代黎明期の代表的なインド学者である泉芳環の業績を、その経歴までも含めてほぼすべてにわたって調査し、文献に関しては、購入・複写を通じて網羅的に収集して、精度の高い著作目録を作成した。

(2) 報告者による準備研究の成果の一端である外国語・邦語「カーマ・シャーストラ」文献リストの充実を図り、未入手、未調査の文献の調査をさらに進めた。

(3) 「カーマ・シャーストラ」原典・翻訳などの基本典籍を、スキャナー等でコンピュータ内に蓄積し、コンピュータでの利用を可能にした。また稀覯本に関しては、書影データ等を蓄積した。

[2008年度]

・前年に引き続き、以下の(1)(2)(3)(4)に見る通り、「カーマ・シャーストラ」関連文献の調査・収集を遂行し、それと並行して資料の解説・同定を進め、資料相互の関係を闡明しつつ、整理した。

(1) 「カーマ・シャーストラ」関連文献の調査・収集を遂行し、それと並行して資料の解説・同定を進め、資料相互の関係を闡明しつつ、整理した。わが国の「カーマ・シャーストラ」の発見と受容に力点を置き、サンスクリット原典からの最初の和訳『カーマ・スートラ』の翻訳者たる泉芳環に関して特に重点

的に調査を進め、泉芳璟氏個人の「カーマ・シャーストラ」の発見・受容の内実を資料に基づいて検証し、それが日本近代に果たした意味・役割をさらに重層的に考察した。文献に関しては、購入・複写を通じて網羅的に収集して、より精度の高い著作目録の作成を目指した。

(2) 報告者による準備研究の成果の一端である外国語・邦語「カーマ・シャーストラ」文献リストの充実を図り、未入手、未調査の文献の調査をさらに進めた。

(3) 「カーマ・シャーストラ」原典・翻訳などの基本典籍を、デジタルカメラ等でコンピュータ内に蓄積し、コンピュータでの参照閲覧を可能にする作業を進めた。

(4) 「カーマ・シャーストラ」原典の文献学的解明に基づく成果を、論攷「猿の心」『駒澤大学仏教学部研究紀要』(2009. 3) として発表した。

[2009 年度]

・前年度の(1)(2)(3)を引き継いで作業を継続し、「カーマ・シャーストラ」関連文献の調査・収集を遂行し、それと並行して資料の解説・同定を進め、資料相互の関係を闡明しつつ、整理した。

・特に前項(1)に関連する研究成果を以下の論文(1)(2)として発表した。

(1) 戯曲『シャクンタラー姫』の和訳—「カーマ・シャーストラ」受容史構築のために—(2009. 12)

(2) 梵文『般若心経』(小本)の「空」(2010. 3)

・日本近代に於ける「カーマ・シャーストラ」関連文献の調査・研究を進める過程で、「カーマ・シャーストラ」受容史を構築して成果をまとめるためには、さらに調査領域を拡大する必要が出来た。その資料収集を含めて、なお若干の時間を要することが判明し、その調査をもう一年繰り越して[2010 年度]に継続して、十分に遂行した上で、これまでの研究成果を補完する研究冊子を刊行する。その後に研究成果報告書を提出することになった。

・さらに今年度発表の論攷②は、より広い視野に立った、今後の、近代日本に於けるインド学・仏教学研究の「研究史」という継続的な課題を生み出した。2010 年度に発表することになった以下の③④の論攷は、いわば本研究の副産物と言い得るものである。

(3) 「svabhAvapratibandha を読む—インド論理学・仏教論理学研究史の一滴—」『インド論理学研究』第 1 号 (2010. 9) 59-99 頁

(4) 「科学と仏教—『般若心経』をめぐる—」『新アジア仏教史 15 日本V 現代仏教の可能性』87-107 頁

[2010 年度 11 月までの繰り越し研究]

・前年に引き続き、(1)(2)に見る通り、「カーマ・シャーストラ」関連文献の調査・収集を遂行し、それと並行して資料の解説・同定を進め、資料相互の関係を闡明しつつ、整理した。

(1) わが国の「カーマ・シャーストラ」の発見と受容に力点を置き、サンスクリット原典からの最初の和訳『カーマ・ストラ』の翻訳者たる泉芳璟氏に関して特に重点的に調査を進め、泉芳璟氏個人の「カーマ・シャーストラ」の発見・受容の内実を資料に基づいて検証し、それが日本近代に果たした意味・役割をさらに重層的に考察した。文献に関しては、購入・複写を通じて網羅的に収集して、より精度の高い著作目録の作成を目指した。その一環として、泉芳璟氏が館長を務めたこともある大谷大学図書館へ出張調査するなどして、その成果を網羅的な「泉芳璟教授著訳書論文目録—「カーマ・シャーストラ」受容史構築のために(2) —」としてまとめて発表した。懸案であった貴重な文献の書影の一部も同論攷の内に公表することができた。

(2) (1)の作業の途上、泉芳璟氏同様、近代日本におけるインド学・チベット学研究の推進した河口慧海氏との貴重な交渉資料が見出され、調査を継続した結果、[2009 年度]に発表した拙論「戯曲『シャクンタラー姫』の和訳—「カーマ・シャーストラ」受容史構築のために—」(2009. 12)を補完する論攷を結実させ、「戯曲『シャクンタラー姫』の和訳(続)—「カーマ・シャーストラ」受容史構築のために(3) —」(2011. 10 予定)として発表する予定である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件) :

① 金沢篤 「戯曲『シャクンタラー姫』の和訳(続)—「カーマ・シャーストラ」受容史構築のために(3) —」『駒澤大学仏教学部論集』無 第 42 号 (2011 予定)

② 金沢篤 「泉芳璟教授著訳書論文目録—「カーマ・シャーストラ」受容史構築のために(2) —」『駒澤大学仏教学部研究紀要』無 第 69 号 (2011) 256-247 頁

③ 金沢篤 「梵文『般若心経』(小本)の「空」」『駒澤大学仏教学部研究紀要』無 第 68 号 (2010) 230-199 頁

④ 金沢篤 「戯曲『シャクンタラー姫』の和訳—「カーマ・シャーストラ」受容史構築のために—」『駒澤大学仏教学部論集』無 第 40 号 (2009) 458-405 頁

⑤金沢篤「猿の心」『駒澤大学仏教学部研究紀要』無 第67号(2009) 338-312頁

〔その他〕

ホームページ等

駒澤大学図書館駒大電子紀要検索

<http://www.lib.komazawa-u.ac.jp/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

金沢篤 (KANAZAWA ATSUSHI )

駒澤大学・仏教学部・教授

研究者番号：20286686